

表象を中心とした内因性うつ病の構造分析

著者	畠 就康
号	366
発行年	1966
URL	http://hdl.handle.net/10097/18293

氏 名（本籍） はた 晶 なり やす
就 康

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 3 6 6 号

学位授与年月日 昭 和 4 1 年 3 月 4 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第5条第2項該当

最 終 学 歴 昭和34年3月
東北大学医学部卒業

学 位 論 文 題 目 表象を中心とした内因性うつ病の構造分析

（ 主 査 ）

論文審査委員 教授 石 橋 俊 実 教授 和 田 正 男

教授 鳥 飼 龍 生

論文内容要旨

うつ状態にある患者に過去の或る場面を想起させてみると、暗い、影のようだ、浮んでこないと述べる。この現象は、著者には看過できない重要なものに思われた。すでに、Kraepelinがこの点にふれ、うつ状態の下では、想起表象がfarbloß, blaß, armになると記載しているが、甚だ簡略なものである。其后、表象の視点から、うつ状態を眺めたものが見当らないので、著者は内因性うつ病にその範囲を限ぎつて、想起表象の在り方を明確に整理したいとおもつた。想起表象では、その感覚的要素と結合強度の二側面を取り上げた。総合様態は更に、浮上してくる速度、想起内容、他の表象へ転動する速度の三つの要素に分けて視察した。一方、内因性うつ病の諸症状のうち、うつ感情 (seelisches depressives Gefühl) と思考抑制 (Denkhemmung) の二つの主要症状と表象とが、どのように関連するか、はじめに臨床場面で視察し、次いで所謂知覚遮断実験を施行し、短時間のうちに連続的にしかも一層細かに追求してみた。

臨床的側面

観察した対象は、うつ病性昏迷状態2名、うつ感情と思考抑制の両症状が共に中程度に存するもの11名、うつ感情を欠いて思考抑制だけのもの3名である。まづ、うつ病性昏迷状態の下では想起させることは不可能であるが、病像が改善されたとき、2名とも昏迷時の精神状態についてたゞ、真暗な闇のなかにいた、何も浮かなかつたし、何も考えることができなかつた、と述懐した。次に、臨床的にも多くみられるうつ感情と思考抑制が併存する11名の例では、いずれも両症状の軽快とともに、表象の感覚性は増し、他方では想起内容が豊富になり、細部も明瞭化し、浮上、転動速度も早くなる、つまり表象の結合活動が活発化することが観察された。次に、うつ感情を欠いて思考抑制だけの3例では、表象の感覚的要素は病前病后とも全く変化せず、たゞ表象の面だけが、思考抑制の解除と共に、前述のように活発化することが認められた。

知覚遮断実験

臨床場面では、表象の変化を確かめるのに長い経過での観察を必要とするが、本実験では、極く短時間のうちに両症状と表象との関連を観察できる便がある。方法は外界からの音響を減少させ、強度の換気扇の音を連続的に流した遮断室に患者を横たわせ、浮白色半透明の眼罩を装備させるのである。本実験を5名のうつ病患者に施行したか、そのうち比較的うつ状態が軽るかつた4例は、遮断室のうちにうつ感情及び思考抑制が著明に軽減した。比較的重い病像の1名は、

本実験により、全く症状の改善をみなかった。うつ感情並びに思考抑制が軽減した例はどれも、臨床場面と同じく、表象の感覚性が増し、結合活動も活発化することが観察された。他方、症状の改善をみなかった1例は、表象の感覚性及び結合活動共に全く変化しない結果をえた。

考 按 並 び に 綜 括

以上の観察結果を測めると、次のようになる。臨床場面及び知覚遮断実験において、うつ感情・思考抑制の両症状の軽減とともに、表象の感覚性は増し、表象の結合活動が活発化することが認められた。しかも、両症状の消滅の程度に相応して、表象の感覚性は増加し、結合活動も活発になることが観察できた。しかしながら、例数こそる名で寡いが、うつ感情を欠いて思考抑制が病像を支配したものは、表象の感覚的要素は健康時と全く変りなく、思考抑制の消失とともに表象の結合活動だけが活発化することが確かめられた。従つて、うつ感情は想起表象の感覚的要素に密着し、 equal 思考抑制は表象の結合様態に関連しながら、消長するものであると結論できる。思考抑制と表象の結合面との関連を詳しく述べると、或る課題についての思考は、聯合心理学の立場からは聯合結合によつてつまり受動的にもたらされる表象を素材にして、決定傾向の介助により、上位に構築してゆく（作用結合）過程と考えられている。典型的な思考抑制はこれら聯合・作用結合、決定傾向の全面的な減弱として説明されるが、著者が想起表象で観察した結合様態は、このうち素材に關係する聯合結合である。即ち、思考抑制の減退とともに想起内容が豊富になることを確めた。併せて、聯合のテンポも迅速化することを観察した。うつ感情が表象の感覚的要素と表象の關係にあるという著者の結論は、うつ状態の精神病理に有意義と思う。まづ、うつ過程がどの程度 *Seele* 的に *Schicht* に浸透しているか、表象の感覚性を仔細に観察することにより知ることかできよう。次に、うつ病の離人症の説明に屢々使用される感情疎隔という言葉、K. Schneider は感情は常に自分のものだから使用してはならないと抗議しているが、K. Gasper は自分の精神状態を眺める自我を中心とすると、表象の感覚性の減退は丁度知覚の疎隔と対応すると説いているので、感情疎隔という言葉を使用しないで、感情の能動性の低下を疎隔の現象として解釈できよう。

査 査 結 果 の 要 旨

うつ状態にある患者に過去の或る場面を想起せしめると、暗い、影のようだ、浮んでこないなどを述べる。Kraepelinがすでにこの点にふれ、うつ状態の表象は farblos, blass, arm になると述べているが甚だ簡略なものである。其后、表象の視点からうつ状態を眺めたものが見当らないので、著者は内因性うつ病の範囲内で想起表象の在り方を明確に整理しようとして本研究を行なった。

想起表象ではその属性たる感覚的要素と、結合様態の二側面をやりあげた。結合様態は更に浮上しくる速度、想起内容、他の表象へ転動する速度の三つの要素に分けて観察した。一方、内因性うつ病の諸症状のうち、うつ感情 (Seelisches depressives Gefühl) と思考抑制の二つの主要症状を取出し、この両症状と表象がどのように関連するか、始めに臨床場面で、次いで知覚遮断実験を施行し短時間のうちに連続的に一層細かに観察した。

臨床場面では、うつ病性昏迷状態 2 名、うつ感情と思考抑制の両症状が中程度に存するもの 11 名、うつ感情を欠いて思考抑制だけのもの 3 名について各々観察した。昏迷時の想起表象は、感覚的要素は失われたと生気のない黒一色におおわれ、而も何も想起できないことが患者の言述から確められた。次いで、うつ感情と思考抑制が併存する例では、いずれも両症状の軽快とともに感覚性が増し、想起内容が豊富となり、浮上、転動速度が早まることが認められた。うつ感情を欠いて思考抑制だけの例は、どれも感覚的要素は病前病后とも平常と全く変わらず、表象の結合面だけが思考抑制の解除とともに、前述のように活発化することが観察された。

知覚遮断実験は 5 名のうつ病患者に施行した。いづれも、うつ感情と思考抑制が併存したものであるが、比較的軽い病像の 4 名は数時間のうちに両症状が軽減し、臨床場面の観察と同じく、それとともに、表象の感覚性は鮮明度を増し、結合活動も活発した。1 例には全く無効で、表象の変化もなかつた。以上の観察から、うつ感情は表象の感覚的要素に密接し、一方思考抑制は表象の結合様態に関連しながら消長するものであると結論できた。

うつ感情が表象の感覚性に密接表裏の関係あることは、うつ状態の精神病理に有意義で、うつ過程がどの程度 Seelische Schicht に浸透しているか、表象の感覚面の観察によつて知ることができるように思われた。またうつ病の離人症の説明に屢々使用される感情疎隔という言葉は Schneider は、感情は自我そのもの或いは自我に密着、不離のものだから使用禁止を強調しているが、Jaspers は自分の精神状態を眺める自我を中心とすると、表象の感覚性の減退は知覚の疎隔と対応すると説いているので、著者は感情疎隔という用語を使用しないで、感情の能動性の低下を疎隔の現象として捉えなことができようと述べている。

したがつて、本論文は学位を授与するに値するものと認める。